

■ 節目の年を迎えて



大西 睦彦*

早いもので今年は阪神淡路大震災から20年目となる節目の年を迎えました。死者6343名の大惨事は、20年という年月をもってしても忘れることはできません。ご家族の方々、復興に携わった方々は癒えることのない痛みと悲しみが続いていると思われまます。当時、私も三宮乗換で神戸の西から兵庫県尼崎市まで阪神間を通勤していたため、通勤手段を絶たれました。震災2日後の19日、バイクに乗り、長田の火災現場、三宮のビル倒壊現場、阪神高速の高架橋倒壊現場を横目に東に向かいましたが、その状況の凄まじさは未だ脳裏に焼き付いています。戦争を知らず、大きな災害を経験したことのない者にとっては、形あるものがいとも簡単に崩壊してしまう様子を見ると、只々愕然とするばかりでした。

また、倒壊という現実土木建築に携わる者にとっても衝撃的な惨事でした。この地震を教訓として、その後、耐震技術、減災技術の向上に多くの技術者が立ち向かい、技術開発がなされ、技術の向上が図られてきました。しかしながら、その後も風水害、土砂災害、竜巻、火山爆発等、地震以外にも自然災害が頻繁に発生し、地震においても中越地震、東日本大震災と次々に新たな試練が我々を襲います。諸先輩の方々、多くの技術者がその都度真摯に苦難に立ち向かい、復興と国土の更なる発展に貢献されてきました。今後も幾多の苦難が待ち受けていると思いますが、「愚者は経験に学び賢者は歴史に学ぶ」という言葉のように周囲の人々の意見を聞き、他の人の経験に学べば、苦難を乗り越え安全と安心の向上が図れるものと考えています。

そのような中、東海道新幹線開業、名神高速全線開通から半世紀、時が過ぎても鉄道、道路の大動脈としてその存在とその重要性は衰えることはありません。また、昨年末にリニア新幹線が着工となり、新幹線も

新たな節目を迎えた感があります。

PC技術が日本に導入されてから60有余年が経過し、初期に建設されたPC橋も現役で活躍しています。PC技術の良さは、基本思想が明確であり、現在もその原点がぶれることなく引き継がれ、更に設計、施工、材料の各分野で技術革新が続いています。原点を学び、歴史を学び、そして新たな技術に繋がってゆく、温故知新が良くあてはまる技術がPC技術ではないでしょうか。日本のPC技術も人間という還暦を迎え、次なる時代に向けて、インフラ構築にとって欠かせない技術として、補修・補強や大規模更新にも有益な技術として、益々活用領域が広がりPC技術がさらに発展することを期待しています。

さて、昨年「社会資本メンテナンス元年」と言われ、この分野も新たに節目を迎え、新設から点検・診断・補修へと既存インフラの長寿命化に軸足が移ってきました。PC工学会が毎年開催しているPC技術講習会のテーマも26年度が「インフラのストックマネジメント 将来像と今やるべきこと」、27年度は「PC構造物の戦略的メンテナンスに向けて」とメンテナンスに主眼を置いた講習会となっています。本テーマ名からはメンテナンスが単なる「維持管理」でなく技術革新をも含んだものであるとの思いが見てとれます。私は「維持管理」を目にするたびに「維持=現状維持」と感じてしまい、国土の発展、成長に向けて若い人が取り組むには、言葉としては少々ネガティブであると思っています。企業でも理念の周知、活動の目的を端的に言い表すためにスローガンがしばしば用いられ、言葉は時として強い威力を発揮します。私のような浅識には思い浮かばないのですが、若い人が頑張ろうと思えるような「維持管理」に代わる言葉が出てくることを願っています。

【2015年3月10日受付】

* Mutsuhiko Ohnishi : 神鋼鋼線工業(株) 尼崎事業所 技術部長
本工学会 理事